

## 2019年に実施したモデルツアー

本年度は5回のモニターツアーを実施した。それぞれを紹介する。

(1) 筑後川遺産巡り 7月25日 20名参加 バス使用 昼食付 7,000円

株式会社アジア福岡パートナーズと提携

このツアーの実施場所は筑後川まるごとリバーパークのゾーン4「水郷と歴史ゾーン」である。

このゾーンは、川がもたらす風物や歴史に培われた観光資源に恵まれている。ツアーでは、昼に名物の鮎を5月から10月にかけて開設される築場で味わい、豆田のまちを散策し、焼酎工場を見学した。夕刻にJR日田駅前に8基の山鉾が勢ぞろいした集団顔見世を見学した。

日田は水に恵まれていることもあって、日本酒や醤油などの醸造業が盛んである。ビールもサッポロビールの工場があり、焼酎では下町のナポレオン「いいちこ」の日田蒸溜所がある。ここはもとはニッカウキスキーのブレンド工場であったが撤退し、いいちこ日田蒸溜所が後を継いだ。

夕方から、ユネスコの無形文化遺産に登録されている祇園祭の山鉾を見学する。山鉾は豆田町と隈町にそれぞれ4基あり、それぞれの町で引き回しているが、この日は特別にJR日田駅前にすべてが勢ぞろいする。暗くなると提灯が山鉾に飾られる。山鉾が動くたびに提灯が揺れて風情が一段と増す



築場での鮎の塩焼き

焼酎工場



山鉾

日田駅前で勢ぞろい

(2) 筑後川花火大会の船上鑑賞 久留米 8月5日 乗船代4,000円 45名参加

久留米の水天宮にまつわる300年の歴史がある花火大会で、西日本一の規模といわれる。久留米の水天宮は全国水天宮の総本山で、壇ノ浦で入水した安徳天皇を祀っている。この花火を屋形舟(おかむら丸)から見物した。花火の残骸が頭の上に落ちてくる臨場感を満喫できる。花火会場は、ゾーン9「川下りと木工芸ゾーン」にある。



筑後大堰にかかる夕日



花火の遠景

(3)豪華日帰りの旅 9月16日(敬老の日) 8名参加 ツアー料金22,000円

昼 御花で食事 柳川市内散策

夜 どんこ舟で月見 夕食を付き

株式会社アジア福岡パートナーズと提携

このツアーのゾーンは、ゾーン10 矢部川・柳川掘割ゾーンである。

ツアー料金が日帰りで2万2,000円というツアーは、初めての企画である。通常、日帰りのツアーと言えば、5,000円から10,000円であるので、破格料金のツアーである。このツアーを企画した意図は、通常料金では通り一遍のものになってしまい訪問観光地の魅力を深く味わうことができないということ、そしてとくに格安ツアーは観光資源の荒廃につながり、採算性も問題であるからである。補助金によって格安ツアーが実施された場合も、持続可能な観光資源にならない可能性があり、結果はツアー客を満足させられないことになりかねない。じっくりと当地の良さを味わってもらい、ぜいたくな気分で帰ってもらうのも、非日常性を求めるツアー客の心をつかむと考えられる。日本の文化や歴史に関心の深いインバウンド客には必要な企画である。

このツアーでは専用のバスは使用しなかった。西鉄柳川駅に集合して、後の移動は徒歩、タクシーそして舟(どんこ舟:柳川独自のもので櫓を使わず棹で操る)である。午前11時に西鉄柳川駅に集合し、駅からさほど遠くない三柱神社に参拝した。ここは柳川藩の始祖立花宗茂を祀っていて秋の「おにぎえ」でにぎわう。三柱神社の宮司に説明を受けたあと、沖の端に向かう。ここには有明海に出ていく漁船がたむろする港、柳川藩主代々の別邸で通称「御花」とよばれる柳川観光を代表する名所や、北原白秋生家記念館などがある。

御花の庭園「松濤園」は仙台の松島を映したもので名園として名高い。この庭園に面したところに代々藩主が愛用した「殿の部屋」とよばれる格式のある部屋がある。ここで昼食をとる。イソギンチャクの味噌煮、「くつぞこ」と地元で呼ばれるシタヒラメの煮つけ、エイリアンのあだ名がある有明海にしかすまない魚ワラスボなどの有明海の珍味に、名物の「ウナギのせいろ蒸」が出され、昼からお酒がすすんだようである。

食後、立花家にゆかりの人からじきじき御花を案内してもらいながらお話をお聞きした。立花家にゆかりがなければ知らないことなどいろいろ伺って、一同たいへん感激のもようであった。御花を出てから、北原白秋生家記念館、戸島家住宅(武家屋敷)、やながわ有明水族館、それに六騎神社の公園などを散策した。この公園には白秋が柳川への望郷の念をこめた詩が刻まれている詩碑がある。そこから御花をめぐる掘割を渡ってかんぼの湯の足湯(からたち湯)に至った。足湯に浸かって月見の

ためにチャーターしたどんこ舟の到着を待った。

どんこ舟には弁当と飲み物が積み込まれ大いににぎわい楽しんだ。この楽しみに花を添えたのが篠笛の演奏である。奏者は全国のコンテストで一番になった名手で、地域おこし協力隊として柳川に来たとのことである。たっぷり2時間、篠笛の音を聞きながら月を見て舟で月明かりの掘割をめぐった。これ以上ないとおもえる贅沢ない午後を過ごし、ツアー参加者は大満足の様子であった。料金が高く集客に苦労したが、ツアーを企画したものとしてホットした気分である。



松濤園



殿の部屋



沖の端風景



御花での記念撮影

(4)筑後川ブランド生産者巡り10月13日(火) 20名参加 8,800円

大川木工所見学と体験 木工祭り見学 有明海ツアー  
バス使用 昼食付  
株式会社アジア福岡パートナーズと提携

このツアーのゾーンはゾーン9の川下りと木工芸で、すでに紹介した。

大川は木工のまちとして広く知られている。筑後川の河口にあり、有明海につながっていて、昔から舟運の盛んな土地である。木造船の造船業も盛んであった。材料のスギ材は上流の日田から筏に組まれて運ばれた。かつて筏船は筑後川の風物詩であったが今はもう見られない。

明治から大正、そして昭和へと移るにつれて、船が大型化しかつ鋼鉄船にかわり、木造船の造船業はすたれていった。しかし、その技術は家具づくりに活かされて、木工のまちとして引き継がれた。春と秋に「大川木工祭」が開催され、全国から多くの人が集まる。このツアーでは、朝から、筑後川河口をクルージングし、日本の近代化遺産で世界遺産に登録された三重津海軍所跡と日本土木建築遺産の大川昇開橋を川から眺めた。昼食は船中とする。午後から、大川木工祭を見学し、大川の伝統工芸である「組子」を体験した。



昇開橋



クルーズ船中の珍味（エツのからすみ）

(5) 玖珠・九重を巡る旅 3月22日・23日 12名参加 ツアー料金30,000円

22日 久留米出発 はげの湯での昼食（地獄の蒸気蒸料理）

笠ノ口温泉 坂本善三美術館 鍋ヶ滝 地蔵原別荘（泊）

23日 日田市大山町この花ガルテン（昼食） 日田のひな祭り見学 久留米へ

このツアーのゾーンは、ゾーン1の筑後川水源の自然と温泉ゾーンである。

久留米を出発して先ず向かったのは、涌蓋山の東麓にあたる岳の湯である。ここは温泉が地上に噴出して、いたるところ蒸気が湧き出している、「地獄」と呼ばれている。しかし、この蒸気は炊事や暖房に使用でき光熱費が節約できる。かつて「地獄という名の天国」というキャッチフレーズで紹介されたことがある。ここに蒸気を利用して料理や加工食品を研究開発している「地熱食べ物研究所」があり、昼食をいただく。この蒸気で蒸した野菜や肉・魚は特別の味わいがある。

昼食後、小国町の宮原に向かう。旧国鉄の宮原線の線路跡をたどり、道の駅ユーステーションに立ち寄る。この道の駅は廃線になった宮原駅の跡地に造られたもので全国道の駅の第1号だと聞いている。小国両神社に参拝の後、小国町が生んだ画家坂本善三の美術館を訪れた。この美術館は、古民家をモデルにした木造で中に畳を敷いていて、美術館としてはユニークな建物である。

ここから鍋ヶ滝にむかう。このゾーンには数多くの滝があるが、この滝は、滝壺の後ろに回れることと虹がよくかかることで昨今人気が出て、訪れる人が多い。またこのゾーンでは温泉がいたるところで沸いているが、今回は笠ノ口温泉につかることにした。湯は鉄分を含んだピンク色で、よく温まり皮膚によさそうで気持ちの良い泉質である。ここにノーベル賞作家川端康成が逗留している。あと宿泊地の地蔵原ビレッジに向かった。夕食は地熱たべもの研究所のスタッフが用意してくれた。

翌朝、地蔵原ビレッジの湧き水仕込みの豪華な朝食をいただく。午前中は八丁原の地熱発電所を見学する予定であったが、新型コロナ・ウィルスの影響で中止となった。それですぐ大山町に向かった。大山町は、今は日田市に合併されているが、ユニークなまちづくりで知られている。特に、「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズで始まった特産品開発は、「一村一品運動」のモデルであり、大山町はこの運動のメッカである。また昼食をとった「木の花ガルテン」は農産物の直売場としても最初のもので、「梅干し」博物館もある。地元の野菜をふんだんに使ったランチは、大変な人気で週末は予約が必要である。

この後日田に向かい久留米に帰る。日田はちょうどお雛祭りの最中であった。隈町にある築200年の古民家に飾られている100年前のお雛様を見せてもらった。



岳の湯の地獄



蒸気蒸しの料理



小国両神社



地藏原ビレッジうぐいす庵



梅干し博物館



古民家に飾られた古いお雛様